

イザヤ書 53：9～10

マルコによる福音書 14：32～42

「ゲツセマネの祈り」

【招詞】 イザヤ書 42：9～10a

【讚美歌】 27 「父、子、聖霊の」

【詩編交読】 詩編 3 2 編

【赦しの宣言】 イザヤ書 55：7 「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。

わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してくださる。」

【讚美歌】 1 2 「とうときわが神よ」

【祈祷】

【聖書】 イザヤ書 53：9～10、マルコによる福音書 14：32～42

【説教】 「ゲツセマネの祈り」

<イエスさまの祈り>

今日の御言葉は、「ゲツセマネの祈り」と呼ばれる、有名なイエスさまの祈りの場面です。

イエスさまが十字架に架けられる前の夜、イエスさまは、十二人の弟子たちと「最後の晩餐」をなさった後、祈るためにゲツセマネというところに行かれました。

この時、イエスさまは、特に三人の弟子たち、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われた、とあります。

実は、マルコによる福音書では、これまでに二度、イエスさまが、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われた場面があります。一つは、死んだヤイロの娘を生き返らせた場面。もう一つは、「山上の変貌」と呼ばれている、イエスさまが白く輝いて、モーセやエリヤと語られた、という場面です。

これらは、イエスさまが、まことの神の御子である、ということが現わされた場面です。そこにおいて、ペトロ、ヤコブ、ヨハネの三人は、そのことの証言者、証人として、選ばれ、立ち合わせられているのです。

ということは、今日のイエスさまの「ゲツセマネの祈り」もまた、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを証人として、イエスさまが、まことの神の御子である、ということが現わされている場面なのです。

でも、わたしたちは、ここでのイエスさまは、なんだかむしろ、神の子らしくない、と感じるのではないのでしょうか。ひどく恐れてもだえ、苦しみながら、地面に突っ伏して祈っておられる。この杯を取りのけてほしいと祈っておられる。どうして、神の御子が、こんなに取り乱した様子をお見せになるのか。どうして、神の御子が、こんなに恐れたり、もだえたりしなければならないのか。

…ここでのイエスさまは、わたしたちにとって不思議に思われるお姿かも知れません。

しかし、この苦しみこそ、イエスさまが、神の御子であるがゆえに、お受けになった苦しみであり。ここでなされた祈りこそ、イエスさまが、神の御子であるがゆえに、なされた祈りだったのです。

<まことの神、まことの人>

さて、イエスさまは、連れ立った三人の弟子たちに向かって、ひどく恐れてもだえ始めながら、彼らに、このように言われました。

34 節「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」

そしてイエスさまは、少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈られた、とあるのです。

[まことの人]

さて、「この苦しみの時」というのは、イエスさまが十字架に架けられる時のことであり、神さまの救いのご計画が実現する時のことです。

イエスさまは、父なる神さまのご計画によって、これからご自分が弟子たちに裏切られること。そして、苦しみを受け、十字架に架けられて、死ななければならないことをご存知であります。

それは、まことの人として、生身の体で生きておられるイエスさまに、迫る危機です。

イエスさまは、神の子でありながら、まことの人となられたお方です。わたしたちと同じ肉体を持ち、同じ痛みを感じ、同じ苦しみを味わい、同じ悲しみを覚えられる、肉の体とその心をお持ちです。イエスさまは、まことの人を演じられたのではありません。まことの人を振りになさったのでもありません。

ここには、わたしたち人間が人生で味わう、すべてのことを、ご自分の中に受け止め尽くしてくださる、「まことの人」となられた、イエスさまの生身のお姿があるのです。

[まことの死]

そして、ここでイエスさまは、ひどく恐れ、もだえておられます。

もしかしたら、わたしたちはここで、人間の中でも、殉教者のように、正しいことのために、恐れず堂々と死ぬ勇敢な人がいたことを、思うかも知れません。大切な人を守るために、死を喜んで受け入れた人がいたことを、思い起こすかも知れません。

それに比べて、イエスさまは、なぜここまで恐れておられるのでしょうか。イエスさまの方が、それらの人々よりも、小心者で、怖がりだというのでしょうか。

…そうではありません。ここでイエスさまが味わっておられる恐れは、ただ、わたしたちすべての人間が味わうような、苦しみや痛みを恐れること、死ぬのを怖がることではないのです。ここでイエスさまは、わたしたちすべての人間が、決して耐えることの出来ない「まことの死」。そして、わたしたちは経験することはない「まことの死」を、恐れておられるのです。

…それは、罪人が、神の審きを受けて死ぬべき死。罪人が、神の怒りに触れて、滅ぼされる死です。それは、神さまとの交わりを絶たれるということであり、神さまに見捨てられるということです。

わたしたちすべての人間は、神さまに背き逆らう罪人であり、本来、皆死ぬ時には、罪人として死ぬのです。誰も、神さまに背かず、逆らわず、従順に従い抜いて人生を終えることが出来る者など、いないからです。

そして、罪人が死に渡されるとは、神の審きによって、生ける神さまから引き離されるということであり、それは、永遠の滅びの中に置かれる、ということの意味するのです。

最後の最後、本来、わたしたち罪人は皆、一人で神さまの審きの前に立たなければなりません。自分の罪を明らかにされ、その責任を取らなければなりません。そして、その責任に耐え得る者など、これまでも、これからも、誰一人としていないのです。

[まことの神]

しかし、そのゆえに、父なる神さまは、ご自分の御子イエスさまをお遣わしになりました。このお方は、わたしたちすべての人間の罪の責任を、すべてお一人で負うために、来てくださったのです。

イエスさまは、まことの人となり、すべての罪人の罪を、ご自分が罪人の代表となって引き受けてくださいます。わたしたちの代わりに、罪による滅びの死を引き受けてください。そうして、わたしたちを、罪の滅びから救い出し、永遠に神さまと共に生きる者としてくださるのです。

それが、わたしたちの造り主であり、わたしたちを愛し、憐れみ、慈しんでくださる、父なる神さまの御心だということです。

その御心のために、わたしたちの代わりに、まったく罪のないこのお方が、罪人とされ、審きを受け、罪人として死んでくださるということです。

だから、この罪人が受ける神の審きの死を、神の怒りの杯を受けることを、イエスさまは、ひどく恐れて、もだえて、悲しんでおられるのです。

罪人の審きの死が、どれほど悲惨であるか。神から引き離されることが、どれほどの苦しみか。神に見捨てられることが、どれほどの絶望か。

それは、まことの人となられ、すべての人の罪を、すべてお一人で引き受けてくださる、神の御子イエスさまにしか分からないことなのです。

この苦しみのお姿にこそ、わたしたちは、イエスさまの、まことの神の御子としてのお姿を見るのです。

一方で、わたしたちは、罪のゆえに、自分がどれだけ深刻な罪人であるかさえも、分かっていません。神から離れることの悲惨さを、神との交わりから断たれることの絶望を、罪人として審かれて死ぬことを、本当に恐れることすらできないのです。

しかも、わたしたちは、この苦しみを、この罪を、イエスさまがすべて負ってくださったゆえに。イエスさま以上の苦しみや恐れを味わうことは、もはや、永遠にないのです。

ルターという神学者は、イエスさまについて、「この人間ほどに、死を恐れた人はなかった」と語りました。

ただイエスさまお一人だけが、罪の審きの死を、神の怒りの死を、心から恐れ、心から苦しみ、すべての者のために、わたしたちのために、それをお受けになったからです。

<アッバ、父よ>

さて、イエスさまは、この究極の恐れを覚えながら。できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈られながら。しかし、最後はこのように祈られました。

「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」

神の御子であるイエスさまは、愛の交わりの中にある父なる神さまに、「アッバ」と、幼子が呼びかけるように親しく語りかけ、祈られました。

父なる神さまは、何でもおできになります。不可能なことはありません。

ですから、イエスさまは「この杯」を、つまり、これからご自分が罪人の代わりにお受けになる、罪の審きや、神の怒りを、ご自分の上から取りのけて欲しいと願われたのです。

父なる神さまが、それを良しとされるなら、そのようになるからです。

イエスさまは、このようにして、心の内を、すべて父なる神さまに素直に注ぎ出されます。願いも、苦しみも、嘆きも、すべてを父なる神さまに差し出されます。

でも一方で、ご自分がどうなったとしても、父なる神さまの御心がなされることこそが、すべてにおいて、最も良いことである。最もご栄光が現わされることである。そのことも、御子イエスさまは、よくご存知であられました。

イエスさまは、父なる神さまの、計り知れない愛を、慈しみの御心を、救いを実現するご計画を、心から信頼しておられました。

ですから、最後には、「しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」と祈られたのです。ご自分の願いを退け、父なる神さまの御心に従うこと。父なる神さまのご計画に、ご自分を委ねることを、受け入れられたのです。

これが、イエスさまの祈りです。そして、このように激しく全身全霊を傾けて祈り、ついには、父なる神さまの御心に、完全にご自分を委ねられることもまた、まことの神の御子であるイエスさまにしか、お出来にならないことでした。

父なる神さまの御心に、ご自分の心を、完全に従わせられること。

苦しみの末に至る、この「ゲツセマネの祈り」こそ、イエスさまが、まことの神の子であられることを、確かに現わす証しであったのです。

<弟子たちと共に>

さて、今日の御言葉を見ると、イエスさまは、三度、祈られたようです。

その間、イエスさまは、伴われた三人の弟子、ペトロ、ヤコブ、ヨハネにも、目を覚まして祈っているように、と求められました。イエスさまは、弟子たちにも、ご自分と共に祈ること、神さまの御心が行われるように祈ることを、求められたのです。

しかし、弟子たちは眠ってしまっていました。イエスさまの心を何も知らず、その苦しみを何も分からず、神さまの御心を見つめようとせず、目を閉じてしまったのです。

イエスさまは、「心は燃えても、肉体は弱い」と言われました。

これは、心では一所懸命祈ろうとしているのに、どうしても肉体的な眠気には勝てないね、という意味ではありません。

「心」というのは「霊」という言葉で、「神に向き合おうとする人間の心」を意味しています。また「燃えている」とは、「準備が出来ている」という意味の言葉です。

つまり、神さまに向き合おうと準備をしても、「肉体」は弱い。つまり、人間的な思いや、罪や、弱さによって、神さまに向き合うことが出来なくなってしまう、ということです。

イエスさまが「心は燃えても、肉体は弱い」と言われたのは、最も祈らなければならないときに、祈ることが出来なくなってしまう。最も神さまとの交わりを求めるべき時に、さらに神さまから遠ざかってしまう。そんな、わたしたち人間の弱い姿、悲惨な罪の姿を見つめて、そう言われたのです。

そして、イエスさまは、このような罪深いわたしたちを見つめつつ、このようなわたしたちを救うためにこそ、今、父なる神さまの御心に従って、十字架への歩みを進めて行かれるのです。

三度目に帰って来られたイエスさまは、こう言われました。「時が来た。人の子は罪人たちの手に引き渡される。立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」

「時が来た。」これは、神さまの救いの御業が、いよいよ実現する時が来た。父なる神さまの御心に、ご自分を委ねられる時が来た、ということです。

これはイエスさまが、たったお一人で歩まれる苦難の道です。すべての罪人を救い出すために、神さまの審きと、怒りの前に、罪人の代表として、たったお一人で立ってください。すべての苦しみと、痛みと、悲しみを引き受けて、すべての罪人の死を引き受けて、たったお一人で向かってくださる、十字架への道です。

でも、イエスさまは、弟子たちに「立て、行こう」と言われました。

ここは、厳密にギリシア語を訳すなら、「あなたたちは立ちなさい、わたしたちは行こう」と言っておられるのです。「わたしたちは行こう。」

…この後、弟子たちは、誰一人イエスさまの十字架の道に従っていくことが出来ません。

ユダの裏切りに始まって、弟子たちは、一人残らず、みんなつまずき、イエスさまを見捨て、離反し、散らされていくのです。

それでもイエスさまは、御自分が選ばれた弟子たちに、あなたたちもまた、神さまの救いの御心の実現に向かって、わたしと共に行くのだ、と言っておっしゃるのです。

「わたしたちは行こう。」

わたしたちが付いて行けなくても、イエスさまが、どこまでもわたしたちと共にあって、ご自分に伴わせてくださるのです。イエスさまが、わたしたちを立たせ、わたしたちのすべてを担い、神の国へ行こう。救いの完成へ行こう。父なる神の御許へ行こう。そう言って、共に連れて行ってくださるのです。

そうして、この方によって、わたしたちは、父なる神さまの御許へと至らされたのです。

この方が、父なる神さまの御心に従い、杯を飲み干し、罪人の死を死んでくださったことによって。わたしたちは、罪を赦され、滅びの死を免れ、永遠の命と、復活の約束にあずかり。もはや、罪人ではなく、神の子と呼ばれて、生きる者とされたのです。

わたしたちは今や、神さまを、「アッバ、父」と親しく呼ぶ者とされています。

そして、わたしたちはもはや、イエスさまがゲツセマネの祈りで味わわれた、恐れを、悲しみを、絶望を、永遠に、味わうことはありません。

わたしたちが、地上で迎える死は、イエスさまの十字架と復活の御業のゆえに、もはや罪人の審きの死ではなく、神の御国に至るための、通過点に過ぎなくなったからです。

そしてわたしたちは、今も、これからも、「わたしたちは行こう」と言っておっしゃる、御子イエスさまに伴われて、神の子として、御国の完成に向かって歩いていくのです。

<わたしたちの祈りも>

…ですから、神の子とされたわたしたちは、御子イエスさまと共にあって、「ゲツセマネの祈り」へと招かれていることを、覚えたいと思うのです。

「御心に適うことが行われますように。」

これは、わたしたちが、常に祈るべき祈りです。イエスさまは、「主の祈り」でも、弟子たち、わたしたちに、神の子として、このことを祈るようにと教えてくださいました。

確かに、わたしたちは、救われても、神の子とされても、与えられた状況や、目の前に迫る現実を、受け止めきれないことがあります。肉体の苦しみや痛み、心の悲しみや嘆きに、様々な出来事に、恐れて、もだえて。神さま、どうしてですか。なぜですか。これはいやです。受け入れられません。こんな御心、こんなご計画には、従いたくありません。そう、訴えたくることがあります。

でも、そのようなとき、わたしたちもまた、イエスさまのように、「この杯をわたしから取りのけてください」と、父なる神さまに訴え、叫び、祈ってよいのです。

祈らないのが一番よくありません。それは神さまとの交わりを自ら絶つことだからです。

わたしたちは心を燃やし、眠らず目を覚まし、神さまに向かい続けなければなりません。なぜなら、祈ることによってこそ、わたしたちは、父なる神さまの御心をしっかりと見つめるようになり、その恵みのご計画を悟るようになり、神さまの御心に、自分の心を近づけていくことが出来るようになるからです。

祈りの時間が、わたしたちの心に、神さまの御心に従う備えをさせます。祈って神さまと共に過ごす時間が、わたしたちを、神さまとの深い対話へと至らせます。そこでわたしたちは、自分の心を素直に打ち明け、また、神さまの御心を真剣に問い、神さまの御心を受け入れる者へと、少しずつ変えられていくのです。

そもそも、神さまの御心とは、神さまが愛のゆえに、わたしたちを罪から救い、祝福を与え、神さまとの交わりの中で、永遠に生きる者としてくださる事です。そのためになら、御子イエスさまの命を与えるほど、激しく熱烈な、神さまのわたしたちへの思いです。

そうであるならば、この神さまの御心になることは、わたしたちにとって一番良いことに違いないのです。神さまの御心は、常に、わたしたちの思いをはるかに超えて、わたしたちに恵みを与え、祝福を与え、平和を与えてくださるご計画のはずなのです。

それならば、わたしたちの心の思いや、願いとは違っていたとしても。望まない苦しみや、悩みを受けるとしても。神さまの御心こそが、わたしたちに計り知れない恵みを与えてくださるものであることを信じて、わたしたちは、それを心から求めるべきなのです。

御心が行われますように。それは、裏返すなら、わたしに祝福を与えてください。わたしを救ってください、という祈りでもあると言えるでしょう。

そして何より、わたしたちは、その、最も大いなる恵みの御心は、すでにイエスさまによって実現したことを知っています。

わたしたちは、自分の罪の責任を問われながら、一人ぼっちで、神さまの怒りの眼差しの御前に立たされているのではありません。

わたしたちは、わたしの罪の責任を取ってくださった、イエスさまの救いの御手に覆われながら、この方に伴われて、神さまの愛の眼差しの御前に立ち、「アッバ、父よ」と、安心して祈ることが出来るのです。

これこそイエスさまが、「わたしが願うのではなく、御心に適うことが行われますように」と祈られ、従われ、まさにその御心が行われたことによって、今わたしたちに実現している恵みなのです。

だからわたしたちも、神の子として、御子イエスさまと共に、父なる神さまの御心が、この地になるようにと、祈っていきたいのです。

わたしたちの願いではなく、父なる神さまの最も良い御心が、わたしたちの上に、行われますように。その愛と恵みのご計画こそが、わたしたちすべての上に、なりますように。

そして、その御心のために、わたしたちが目を覚まして祈り続け、イエスさまに伴われつつ、御国の完成の日まで、喜んで従い抜いてゆくことが出来ますように。

【お祈り】

わたしたちのアッパ、父よ、御名をほめたたえます。

御子イエスさまが、祈りをもってあなたの御心に従い抜いてくださり、苦しみを受け、十字架に架かり、救いの御業を成し遂げてくださったこと。そして、罪人のわたしたちを赦し、あなたの子どもとし、愛の交わりの内に生かしてくださる、その恵みの御心を実現してくださったことを、心から感謝いたします。

あなたの御心になることは、わたしたちにとって、もっとも大きな幸いであり、もっとも大きな喜びです。

どうか、御国の完成に至るまで、わたしたちもまた、御心を成し遂げられたイエスさまと共にあって、罪の思いや、肉の弱さを捨てて、「わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」と祈り、あなたに従っていくことが出来ますように。

そして、あなたの愛の御心がこの地に行われ、すべての人の上になり、御国が来ますようにと願います。

このお祈りを、イエスさまの御名によって祈ります。アーメン

【讃美歌】 298 「ああ主は誰がため」

【信仰告白】 ニカイア信条

【十戒】

【献金】 65-1 「今そなえる」

【主の祈り】

【祈祷】

【讃美歌】 28 「み栄あれや」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、
あなたがた一同と共にあるように。アーメン